

清暇錄

十

大正十年十一月上浣起筆

特別
14
1919
341



清暇録

十

十一月八日以降



老家の
玄関
と愛
犬



○三村中法名は本名修善寺に印を以て終る



○大隈元侯大患の終後回復を遂げたるを元體の
かとりまへかゝりて座後こころの趣をまゝあらずに
りた二三の回人と候の御持色に即發而こころを
換子を以て候しとる事膀胱七指合後七略を後し
腎膀胱七回の如く復し肺のラウセル七ゆえに之ぬ
候まらう疾患部と成る刻念日念氣ハ候也

元比の足はあとの黙々びちり同沈思の状に
あつたと云ふは、候の談として記すの氣
つてこそこの位考ふ子の元計とんじ載せ此の
てあつ

○自分の社去る日内印刷会社を子比と里年成結ん
て別日し本年末とこれと見ざる利益を算計得た
而して此の年末迄は八回に拂込を決意すんハ、そん
と五十番用全部拂込することと、
八時り物なる励行することと、
備ひて結率し増進を固り候つて以つて時り程
の欠を補充するべく、
今後すもつ資金を要するにつきて、
十二

増法又を行ふことと、
創五十九周年もあつたの年末と云ひ、
利益七あることと、
昭和元年の年終りも、
と云ふ二年二割と定め、
今もこれに依りて増法を決することと、
致し、
十一月九日

○金津、潮疾患を余の初めを定ん、
朝鮮旅行の途に上ると、
ハ朝施を心えん、
と云ふ位も云へ、
中村某の

色を
白る五十四のうを 精の、山蘭甚良に 故人多きうのい生
前余交あり、余のうを花の印を親んとし、あまの
りしこともあり、染れを破るま、以て我を刻界
の大家也、染れを印を刻する、お仿漢の扁款と
判るあるま、ぬを得たり、余は津の花より、石を、其葉
を、其葉を、其葉の石を、刻す、刻すの跡の存
するもの、さしを、乃ち仿漢、墨を、又三幅、
のことも、さしを、朱線二色を、以て、仿漢、花刻を、
するもの、さしを、染る、乃ち、最、好、其、長、し、
他の二幅、刻の、一と、東坡の、骨、心、す、
刻、其、印、に、白、墨、を、用、ひ、
任の、語、を、得、し、
十二

二年の、元、に、刻、し、
支、其、の、味、掬、ま、
な、仿、漢、親、を、
印、を、
北、の、八、幅、を、
款

余、
の、家、を、
古、香、の、家、を、
七、女、の、
家、古、香、に、
終、
余、

き月君らやまの起る人に平凡を
了子の有きまゆの器玩果つくを殖
器のまらば甚る水徹を空を百通す
奇人におるこころさしぬ人をも
め地獄の地獄に教習の習有
狂舞の舞に狂舞の舞に狂舞の舞に
あて終おおむ狂舞の舞に狂舞の舞に

君も僕も多し年はひびきすも其の
のひらひらのま月方にある大に果れたる趣
向にて今更らるる徳川の末
期とくうあつたはひきすも其の
まをま行するは甚る向方まに
まをま行するは甚る向方まに
赤城書 昌碩 城をまをま 出又

御幸の序をひる。

十月十日記

西洋の文藝家の家説を再輯め「蟹の泡」三巻
法万の文藝と點して出し比のそついで此序を
あるの、同じ出版元から我が邦の文藝家や説を
改訂し比のいと書ぬらん此の二巻を即ち其
の書めを意し比のいある、有韻なえく、此も七
蟹の泡の初巻の終りに聊の著をかくと
さきぬ、初巻往年疾速に書つて伊豆の温
泉へ去りて静養のしことある、無聊な
坊うあて龍女の觀聞の口を骨し比のそ
のうまく泡の中や龍女は法家の侍をひてあ

ついで偶々同じ法家の侍の口をひてあつて毎
夜余の序説を聞くを例と一、そんう十巻の
に満り、いつ七日夜の目更えを知り、自らうん
聴ありお世話のそ知らんお七しういと云
ふと私を厭しして法説を継續せしめ、全部
連記をし比人するあつた、勿論一時の母具、衆
一との序説ひあつて、時代を因と勿論
秩序七論次七無い、又連夜續けしものるもあ
つて、法家の種切のそあつてあり、龍女の口
を持ちしと書責を塞い比のそある、連記を補
正する、法家の此書を省きたるのと思つ比のそ、出
版元も省いてと成らぬとあつて比のそ

乃皆寛政六年の書と判しはるもの也前日得
る博思殿記一帖と姉妹帖より三帖合
せし一帳に入らばき也

家字貞石圖

一帖

揚守敬縮紙一帖の余は年揚守校本を不
考せしものも無し此帖甚だ濃古也帖
の首端に鳴鶴の聲字あり帳に代へて桐枝
の具はるも古きぶへし是等得しもの四帖に
こゝんと大なる一帖あり内容なるは是れ何
れ今之處に未判ししもの

此帖四角に古碑縮紙と云ふ家字
貞石圖と守敬の余しはる也保をこ

十二

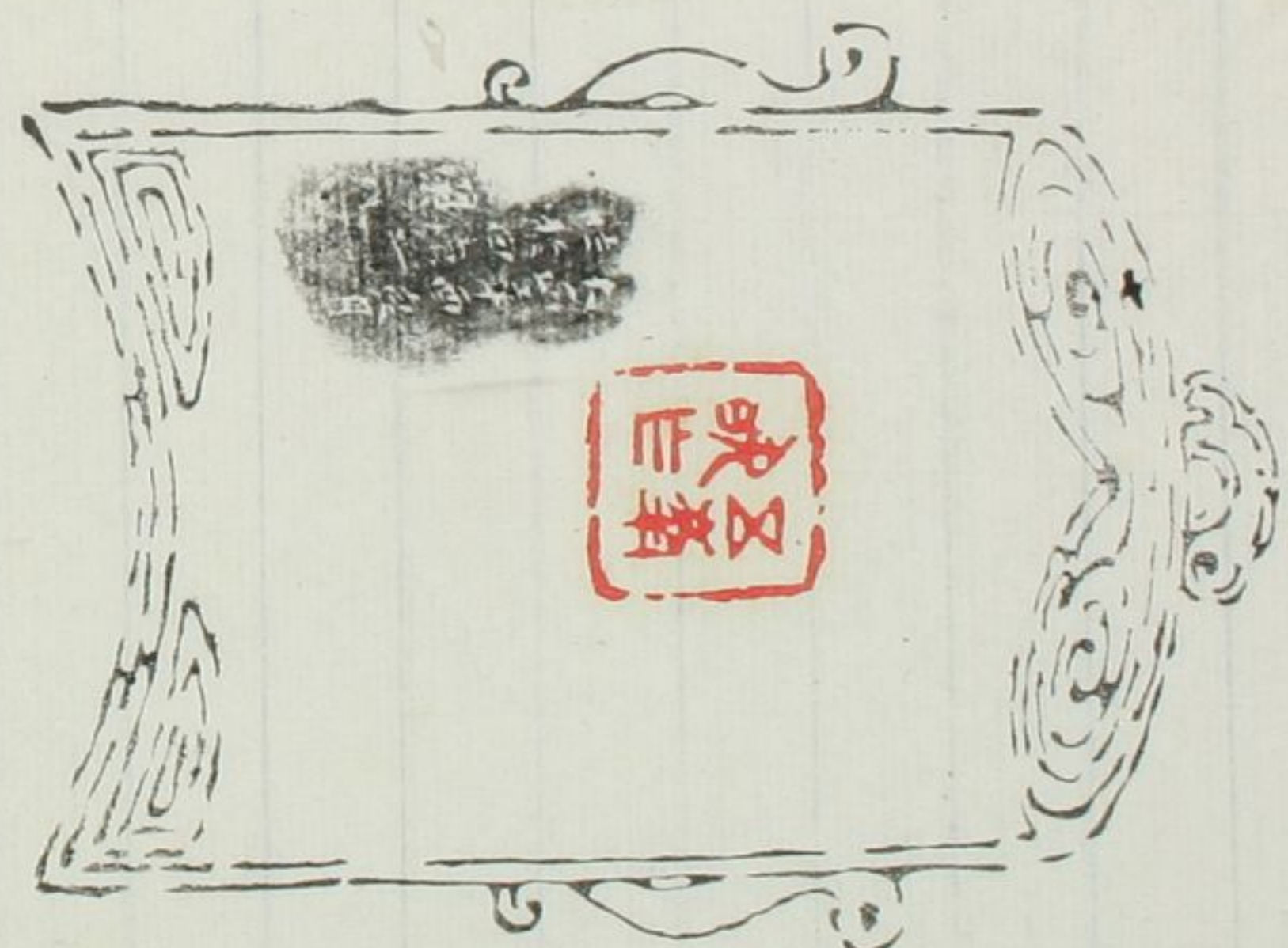
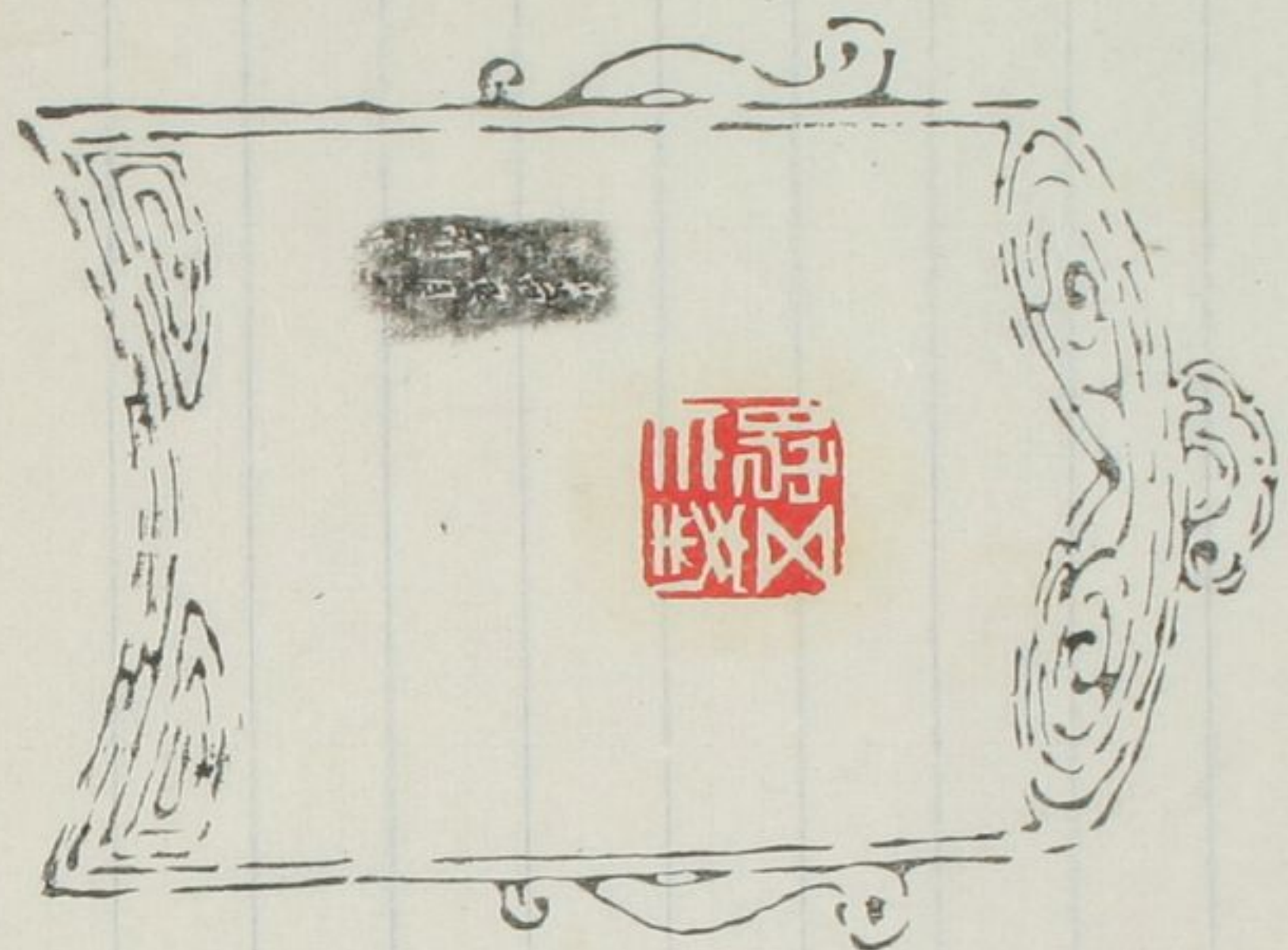
こゝに記す

十三の録

今日初めて朱舜水文集三冊を兄に價る二十圓と云
ふ不買帰す

○五峯の爲め石川蘭ハに属しは五峯晩年の
印二顆成ふ五峯の兄と云ふ者あり此の四字と五
峯自ら撰みたるもの、唐やりのもの、用へん
と判すもの、五峯一跋して後年一に送ひ、此
の印のある者もハ、人必しを祝して五峯年の純
筆と云ふらん、六字あり絶筆と云ふ果しは
世表也

十一月十日録す



の大改の木島なるものと其著日本金石史中巻上板
 の付字跡あり中を換するも巻尾二跋に代へて余
 以上巻の字跡を漸しむ出状を瑠璃版に附
 して収めあり、辛酉の尺牘此巻と在る所
 傳はるるにゆゑのうらむるを想憶禁しむはさる也
 大正十一年十一月廿四日手記

の昨夜散策中一虎本を購ふ、支那佛祖の道里歌
 を彙刻し附するに如徳を以てしるもの像計三万
 四十圓、首巻佛祖正宗三巻南山秋正宗三巻青
 原正宗四巻教律蓮宗、又其の各宗道影の大
 観るるに序に徴する、啓公禪師、康熙年間苦心
 得る所一百六十六尊、拙於正脈、一属し教律蓮及

○昔の三張呉服店に陳列を以て織實の合雙成り
出陣の古代烈衣模織の列品を觀る此の模織
を十年むろむ前々龍打平袴苦心の結果
入成りものる余の如人多く比る其のう、今貴
に分つ裂帛を一説を記すことあり其に技二の
物も入すし其を記すの如あり、此れを三張呉
服店二階の一隅に出陣の備に充てし半ら心
札をつけし矣却する故向うと點數を二万點石
あらんう多くハ帯し、聖の張り地を曲、袴の地
等こ原るを法隆寺正心院に花を多階唐衣
良羽の錦結羅縵、御染摺文ぶより華族
記家に花する名物記中古の耳飾戴の金

銀襦袢道、モナル、印金、加比丹、母占城織
唐校の類に列り、皆々特世の珍しと愛人
らす中を湯をる者躍し、今又袴を穿る
寫目を許す、このも也龍打の斯者の
天才と稱する名族とのなりきし、祝府を開放
（貴家寶を）模するを許し、今又袴を穿る
模品を皆其を亂るじり物を授け其に激
賞の價あり、臨るをせんことあり、今又袴を穿る
今心りたるものと思ひて、禮の着付ありて、
七斯くまが模し、今又袴を穿る、今又袴を穿る
の授けを弄する、日一端をうく、徳川初期の建築
美術の物、今又袴を穿る、今又袴を穿る、今又袴を穿る

美術木彫を織物の昇生を試み或は凸凹ある織物
 により或は光線の屈曲を利用して近代彫刻を表現
 したるものあり、或は着衣初物の閑意を高雅なる木彫
 と四角の唐摺の隈細文を併用して意匠を巧
 んだものあり、縞子織物に時傳を嵌めしものあり
 糸織上げたるものあり、四角和紙の因果経を四角帯
 の織出し或は金糸唐摺を後物化せるものあり
 而して占城織備唐摺を模したるものあり、これ等
 云々の考案あるも吾人の蒙を蒙るべきものあり
 巴の解夜を物たり扱ふときも
 る記し漏しなく此巻の終にねらるる印利日記
 たる大要を記すべし
 十月十九日記

一占 城 織 廣巾三丈物半巾三丈物三十餘種

ちやんばとは今の安南國平順州(順化は安南の首府)足利以後和蘭陀船又は唐船又は我貿易船によりて舶到し織物の名稱となれり
 今模するものは前田侯爵家の御秘藏に關り寛永十六年肥前島原の亂後鎖國の禁令行はれんとするに際し前田三代小松中納言利常卿小堀遠州侯と親善にて之より先鎌倉東山の古名物製を普く聚集せられ鑑識すてに室に入り深く古美術織物を鑒愛せられしより御家中有識の士二名を京都に派し加賀屋何兵衛と假稱し町人に身をやつし其頃京都の町人大文字屋正三郎(下村大丸呉服店主)目利きなりしかば打連れ長崎に下り良品を撰み齎し歸りて以來三百年加州家の秘庫に納め完全なる御保存により今に至り御寶藏古の古美色恰も新製の如く而も新製に現れ得ざる緋色美は觀るものをして無上の快感を與へざれば止まず今回國家的思召を以て模製を許されたり其用途としては衣は勿論表装に俗に住器に用ひ可ならざるなし

一絹 唐 棧

トウザンとは古昔ジャバ・スマトラ等南洋人の織物といひ又印度の Sio Thome の地名より起れるともいひ我國にてはサントメと訛り和蘭陀船によりて舶到せしも後大に行はれしより唐船によりて盛に輸入せしよりトウセンの舶載せしサントメを唐棧と呼ぶに至り又奥織とはサントメの奥地に産せしさいふ程の意なるべし
 稀に足利のものあるも織豊時代のものすてに少なく今俗に古渡といふは天明より文化文政のもの多し
 御本といへる濃花色に赤の棒織は三代將軍家光公の常用とせられし也西鶴の世の介も奥織を着たり江戸藏前十八大通等の風流により大に流行し明治以後消滅せり
 本來植物性糸に色染堅美なるを特長とすれど衣として稍重きが故に今回絹糸を以て其洒脱なる風趣を捕へ實用の快美を主とせり

○五峯 疾をのめてすなゆか
 の印を謝するはるは
 詩も切四枚を贈る、余は漢家に荷せんこと
 とゆふ、友人の志を得あさの心を以つるをいふを

す、此の徳重十の山崎の山崎の可らずと云ふ十月
十三年記

○目下印刷中の余の著述の権益五十年、揮毫
を七とある友人の筆跡を留めて記念せんとす也
五十年一冊十枚を第一し皆高き道七とす事
五十年一冊十枚を第二し皆高き道七とす事

徳重の沈

藝苑一夕話

藝苑一夕話

縁名もふを得し

(十月十日録)

○秋の三葉し(園方を過る所のこと)し得し
不たの如し

十一月十日録

一 洗心洞劉記

一冊

●皇表 初榻大本を得架守の荷
才今の得る所のもの 薄葉大本也表
紙破換ある名珠と云ふ

一 静寄軒文集

六冊合二冊

尾張二河の傳若也皆洗心本に元
七亦其一也何れか、流布後あり稀ん
るるの如く、續甚比不慮也架守
冬後と傳あり

一 花杆教正續十四冊

水戸の版に 版末存るもの 可今海
布すもの 皆新榻に傳り而も今
日得るものと初榻本也 架守改に古押
譜あり、之れと併すし

一 名家手簡

二十冊

此出七二十冊揃合古と稀し隨之
價高し

一 唐太宗原風也

一帖

後刻に古筋の年号誤印に弘治島
和是に刻せしめしもの、就治玉細
二帖も之傳る者ありとぬ

の船中、今の船旅を終るべきに、現の示す

大々 彼方こころに 船うちちりて 川口の

あきのわめくをふねはらひむく(大船を)

いつれとてこざわいどげあつたきめ

浪有こころあまのつり舟

あきそ船をちりつくとその津の

あしれしつるまき旗みめ

船よきあさのうらわえうちあひを

しるきあひるのうらわえうちあひを

わらわえバササの皮を流しむ

汐のいろをしはらむのあつ

帆柱のちみち又あつていそ山の

寺のちみちあつていそ山の(尾巻)

うすあわく雲の帆柱におどろき

うすあわく方々のうらわえうちあひを

八十崎の空押しあつていそ山の

船のちみちあつていそ山の

〇三十百枚のちみちあつていそ山の

報を得念皇の問す十一時れ机に過るを

常し指すゆえに船を空を起しむるに

へす世道の敷あつて机を空を起しむるに

の内出並のちみちあつていそ山の

あつていそ山のちみちあつていそ山の

珍、公壇泣射を絶す、病入と氣息奄々として七也
也死幼、迫つて云々種、余、貴、言、余、を
行、之、思、め、太子、斗、と、言、と、諭、せ、し、も、ま、ん、と、氣、休、め
ら、う、と、し、聽、き、入、れ、ず、某、下、を、求、め、る、に、信、に、紙、中
と、書、つ、て、言、ふ、病、多、う、と、左、の、時、を、候、し、且、つ、云、く
と、ん、と、い、ま、い、推、敲、を、行、さ、る、悪、行、を、い、ふ、と、は、
某、と、う、と、~~某~~、と、手、七、~~七~~、震、へ、す、す、ら、く、と、
き、日、示、く、ん、と、を、思、ふ、ん、と、

才、性、を、擧、げ、掃、蕪、碑、痛、大、心、を、九、家、如、少、期
報、正、志、宜、壯、志、懐、興、門、力、に、衰、年、相、暮
前、唯、有、淚、此、年、地、下、定、お、池、思、量、未
至、汚、名、即、意、多、應、答、不、為、也

右、福、先、登

瘦、骨、如、柴、竹、有、絲、阿、見、字、眼、下、意、
遲、猛、頭、時、見、淚、痕、濕、應、痛、而、翁、顏、
日、衰、

思、獻、古、為、余、字、也

五、出、年、絶、筆

例、の、如、き、道、徳、之、也、
宜、お、池、と、云、ふ、を、以、て、之、を、信、奉、未、年、才、を、壽、を、保、ち
得、べ、し、と、底、或、し、と、云、ふ、似、し、う、現、以、ち、也、先、の、百、七
條、以、ち、思、惟、智、し、う、際、を、し、今、と、縁、切、と、也、
ひ、り、計、畫、七、難、難、し、う、と、歎、息、せ、し、う、と、
初、給

て前の書目香遠の花本を購ひたるとも對照する
は重複せり即ち贈ひ入る外に匡結刻経欲鈎勒
本を購ひ去るに満すし要も為興せる傳る此法帖
往年見せしもの四帖一部をとり今得しもの
全補せざる似たり然るも六面目の一端を又と
得べし字奇古座鶴銘に酷似す余在帖を得
人ことを疑する年あるを名客物に年入る且
く之れを以つて渴を疑ふんとす可耳

黄蘗馬僧泊如書する本の金剛般若波羅
密經の真身年間刻すも不ぞ大聖武大
の行書也也玉極めて道美法書と為す
是の楷云々嘉徳魚中張の言えり

とす後丁の有無處にん判しうこし珠
張客主人余り得る也 十月廿三日記

椿山花輝南田玉帖を得て思ふ椿山の
南田に似たる玉あり恐らく此帖を言ひた
るものこと

又云く泊如の金剛経跋文を思ふ宋の張即
之の年去を臨摹しつものを知る前此
るを脱しつものあり故に附記す

又云く泊如の金剛経跋文を思ふ宋の柳公
権字同経と最照して整理し法丁を
知り得たり但し柳と張と互い互増損
異同あることを思ふ見たり柳公権の

且つ大體の生得をも大衆の没後まゝに移
傳を加へ来りても其に彼をゆるむのいひは
心を晴し稚頼と嘆かむの長びて其歎を
ふん及んかたしまた其の板を後く此業
すん巨費を以ててえを婚め山室彼の
志らんや

ましく獨りの養子と他の追隨をわらさ
門下におよぶものも其神の迹に得ず
ずたに妙道と後世にまづの所を感
道交の義義品もあつて或る年この
ことあり年一と遊に得ることあり
死す大雅今の時ありて自然寺の
十二

曲げ脚を伸べて年とせし佛の
壇の清長と論定することを得ず
彼のありの悲し

の家を印傍略に傳つと昔も元
又且その印傍をかくるつと印
ありまゝるるつと移るる傍し
ことを移るるも全画
も其に疑心の傍し、
花とまゝ一棧ハ芳
あつた止一書を
おとらん

の別府に轉居するの會津に
十一月廿四日

多経・利東のそとをうら大合上座町の石佛
をえりてを進く齋屋の状況と齋（註）
来り

大合上座の石佛と之をよめる

旅人のさしやまきし苦花の

かたをつめみきみほとけの胸

いびきんし石の佛のころもこしと

ついにをばそと葛の葉あを

大合をよめるよととらちとよるとま

葛葉の潮のちのあさかひる

よふおとあきと

山はくうすはあさくし出て

葛と湯の葛葉の海

十月亦る

秋叶人

○四分高麗(古産)五峯の病をゆい、ゆ路来功、
午飯を興うし行と流も、古産五峯の流をま
し、幼少人を吹ふの揚あきと云々夫、流次世成
流流のよこぬい余の、取人のゆと葉を入るも
可るる病を不可るる病名あり妻葉、流々加草
こびするものありと云ふ、古産の朱竹炮と草も
同じふあり、ゆ路探の稿本の高野休隠と卷
ちるるをえしか、久張経指と雌葉をぬくあり
と流る

十月亦る

明治二十五年三月十一日第三種郵便物認可

東京朝日新聞號外

大正十年十一月二十五日

皇太子殿下攝政

皇族會議御可決

帝國憲法第十七條及び皇室典範第十九條第二項により攝政を置かれ同第二十條により皇太子裕仁親王殿下御就任の件に就き皇族會議令の規定により本日午前十時より宮中東溜の間に於て皇族會議御開催相成り慎重御審議の上滿場御一致を以て右可決御確定相成りたり更に皇室典範の規定により午後一時より宮中に於て臨時樞密院會議を開き皇族會議の決議に御同意申上げ直ちに官報號外を以て攝政御就任の詔書を公布せらるべし(夕刊詳載)

東京市板橋區龍山町四番地
東京朝日新聞發行所

發行編輯人 加藤 四郎
印刷人 沼田 寅次郎

詔勅

朕久キニ亘ルノ病患ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルヲ以テ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ皇太子裕仁親王攝政ニ任ス
茲ニ之ヲ宣布ス

御名 御璽
攝政 名

大正十年十一月二十五日

宮内大臣 副署
内閣總理大臣

聖上御不豫より皇太子攝政の大任に當りしこと
多し命を承け左の如き御璽を賜はるるに
二十五年三月十一日

二十五年三月十一日

○五峯小原を得て、自らも三曾孫の志
つて、いさゝか電気(名)たつと、あて来たり、見あ
つた、日く、凍動物、提取も出来、顔も七、さう、元
と、氣もあつ、一時、万、さう、つ、け、行、話、し、た、が
別、に、夜、音、の、換、ひ、も、認、め、ら、う、た、五、峯、と、さ、う、い
う、中、の、い、ち、と、死、ぬ、も、た、か、あ、か、さ、う、一、時、床、を、離、る
や、う、は、さ、う、も、知、ぬ、ぬ、激、居、の、足、集、う、と、一、寸、出
た、い、よ、ま、比、三、千、回、の、周、係、う、あ、う、と、笑、つ、て、後、は、あ、い
う、あ、い、と、知、つ、て、長、さ、の、か、親、族、を、と、何、ん、か、金、を、
え、て、兄、に、あ、い、ま、来、た、若、し、た、は、何、の、話、も、に、使、つ、て、津、本
興、一、七、債、し、た、金、の、内、五、百、圓、お、お、お、い、と、い、は、後
ろ、又、云、く、自、分、の、う、ち、か、へ、片、身、に、け、を、さ、う、さ、う、長、

り、因、り、も、あ、い、さ、う、奥、子、を、た、ま、の、幅、を、知、る、こ、ん、と、
娘、の、い、さ、い、は、貞、子、を、と、し、興、つ、て、比、文、彦、を、作、成
の、政、社、に、出、い、た、大、幅、ひ、あ、う、と、話、を、い、余、も、と、い
は、伊、助、の、計、を、傳、へ、い、ち、稲、田、傳、士、の、未、診、あ
る、筈、漸、や、く、回、信、さ、う、は、経、歴、を、報、せ、し
め、ら、ん、が、い、と、越、難、を、と、案、を、な、す、花、方、而、も、
又、の、者、状、を、報、し、て、登、謝、表、を、書、き、し、る、の、出、状、を
又、こ、代、つ、て、若、き、是、の、手、袋、中、に、あ、う、さ、う、を、告
げ、て、別、れ、た、
○別、方、も、あ、う、會、津、に、朔、を、終、る、を、い、二、回、別、れ、た
止、御、を、報、し、来、ら、う、即、ち、方、に、報、せ、
井、の、記

井、の、記

井、の、記

今朝湯のあめのうららきと 飛をとおよ こんむ
まみおのをざりしものを ちちのくに三十一文
うらままとあめが 得るや ちちののものを
ちちの宮のものを 別方のものを ちちの
ちちの宮のものを 得るや ちちの

しげいらの鳥餅のものを ながまがつせに
とけとちちの ぎし佛をとおよ 徳寺

宮崎と人の指さんともし ちちを ちち
能きとちちの

おのれをちちのあまひくこの ちちの 灯の
果ややおはす 市村島垣 二首

聖土の徳をあまつせ せの ちちのすまの
ちちのあまひくこの ちちの
あまのちちの徳の南にうすまの
佛のまふこ ちちのすまを
あまのちちのちちの徳のこの ちち
ちちの徳をあまつせ

以上海陸寺道徳

いかに湯のあまひくこの ちちのすまを
あまのちちの徳の代をとおよ
あまのちちの徳をあまつせ
ちちの徳をあまつせ
以上三首別府

大梅是原本意也

板武天皇御宇之定大東平然治平に
此形今

延喜の御宇に定四ノ内才三番の
仁有る相に行成の平然也

四天王

道分相に依理心 行成の

らり業の

河州交命即部尾村西谷野月

信目之也市任

此の奥書に徹して寺院の庵をうとむる地物便
○を以て見るべし古の致ありたて四七八句を

抄す

母始よあ於月前信雪回生海縁

水上波浪心性あ沈生真実の光

月雪時中り歎也

いまい全部法を得た更なるあへし

十一月三十日記

○大分縣別府に静養中の余海に親しく連る
府末の修をきき皆田杵希に其附也の
石佛群のうらに聞せざるし余力八箱と回
るし其の備息をるを亦みざる今他
日の春をみる子と二三を抄し

一 ちの印札の湯日寺遺跡をみる凡そ此石は
 石の形が邦のありあり他の石佛像を造るに
 のも此一寺のほかに念をきくを得ず其
 数の多きをこのより其の石の形は木佛
 と同じく他は比すべきものありきと
 印札の形も此の形より上印札の形も
 一 寺の印札の石佛群の遺跡をみる結果と
 先づこの形は石の形と抗強と撤回する
 のよりいさげしもの形は石の形と
 顕著な遺跡をみる海布をみることに
 めいをも得ずおれは意味のありきと
 印札の石の及び其の他大分下の既見の石

佛の遺跡の遺跡ありきものと
 全あぬやうな形も何れもその形
 二 寺の形も此の形と抗強と撤回する
 一 冊の形も此の形と抗強と撤回する
 つい一後しての形も此の形と
 印札の遺跡の遺跡ありきものと
 出ても板碑をみるにせしむる板碑も
 のさきも形も此の形と抗強と撤回する
 つい一後しての形も此の形と
 の上鉛定するにせしむる板碑も
 一 引揚げ、板碑の形も此の形と
 武蔵の形も此の形と抗強と撤回する

よもが元とんたることいふの事今此地方に
ありしころに古縁とありて、枚碑
と石佛とい時代は柱と距離ありか直接に
関係する事と明らざるも大いなる石佛
ととて此行きをよむるも又これを彫刻し
おうする生居も天下に珍らしくしむる
へい此枚碑をいふは、又字を晴、といひ
とよかとも河漢の石をいふともかくし
一印杵町字の所といふは、五体の佛像あり
よし、是を埋えしとありといひし
一上野元町とて、薬師の所のありて、考察
をうけたる後二里は、うを物し、東植田

村方字高瀬の宮といふところの石佛像を見
おいたり、岩盤に横二尺五寸、タテ二尺位
の龕をつくり、其中に三尊を刻したるもの一個
あり、いふに、多くいふは、是れ、そのもの、他
の一個、不中二間深さ一間高、一間の石崖
中に五尊を刻したるもの、弘仁以前の作と
いふしと思はれ、状貌雄大、渾厚、其のあり
は、いふに、そのあり、勢的、其の像を、その
有り、五尊の、最右端は、降三世の王とあり、
其次は、如來輪、執音の、六、初月、そのあり、
其次即ち中央を、そのあり、其のあり、
いふ、大威徳の、そのあり、其次即ち左端を、金

別教又るまきぎの類 どのゆゑも六智の如き論
の如きら其形貌の上からいひて本邦稀有の
ものなる處をいふやうなり、大和の寶生寺に配
ある(このときをみる見ざるもの)河内の新心寺に
一配あり(これを純佛)其ありともを言ふゆゑに
存するものとす、このころに此石佛群の形を
崩れ珠垂すまきは夏墨と朱とより成るる
彩色の殆ど大部の喪失を蒙るることあり
し、まことに雄雄たるものなり、
此らより、善惡を穿たんとす、穴その遺跡あり
又埋葬のあり、穿らんとすと思ひ、横穴七あり、
古人いふ所の穴あり、とて應同し、このを念記す

作りたるものあり、とす、このもあり、とす、

一上野は古圓府の隣接、田壽寺と稱する寺
(一名岩室寺)………、
群像のあり、無記………、
きたること七位ありしと存、此所にも寶戒寺
といふ真言の寺あり古刹と稱し、
可なり、この寺の作りたるあり、
十二月三日を成す、

○今月十二月一日、別府から五枚の巻を………
具論を………、
滋城に關係あるもの………、
す、あつたは是也

ありと思ふなりいなりなりと殊な縁起といふ
まじりて子供の誕生とゆふ言ふといふ関係なき縁
起物といふしかなる遊々少佐の物入物い
思ふなりいなりいなりかくの如く観しと初め
能本附辺の木の高嶺の如き山嶺と首子
まじりての玩具といふしことを首首い
心しと存し九女の神授と表而とハ幡担
こゝも其縁起の如き幡や表や鶴や鷹
や鶴や幡担子強のしハボルにありてハ生
殖其その中の形似のありて修飾も
んが女の如きなり而してハ幡担子の物
應神事といふとるなりとるなり其の如しといふ

此に深き意味をある神託といふの如くは
んもめいといふときん家の如くは
遊戯の如くは玩具の存在と主たる人
も有し、こゝもまた後世の出来
こゝも此の如く断る所宗家の如くは
存し、日本の山家といふしを玩具とい
ふなり生長する七倍と云ふも多し
朝鮮の如く今も土地に玩具の意を
ぬきことおもはるき四七ありて
の如く生んるなり種と種と
の玩具を有するなり例
べしといふなり

湯道に平らにして、垢を、朝解の如く、今迄に
る湯道ありこと、**新田**（**新田**）依る事あり
少佐の玩具の例を以て此同様に、**新田**の如く
と存し、以上おの玩具の論の由を述べざるおき
かや、玩具の本質を觀し、垢を、**新田**の如く、**新田**
の浴衣を好機とし、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
材料を得て、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
と仰る、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**

別府と湯島の事、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
も玩具の一斑を觀察する、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
多人形と普色のセルロイド製のもの、**新田**の如く、**新田**
姫路製のもの、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**

湯道に平らにして、垢を、朝解の如く、今迄に
る湯道ありこと、**新田**（**新田**）依る事あり
少佐の玩具の例を以て此同様に、**新田**の如く
と存し、以上おの玩具の論の由を述べざるおき
かや、玩具の本質を觀し、垢を、**新田**の如く、**新田**
の浴衣を好機とし、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
材料を得て、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
と仰る、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**

○大隈帥も、電玩を老侯余に面會を理するに
し、ある、電玩のこころを、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
来るべしとの事、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**
る、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**の如く、**新田**

流るる代もさうなを流すの

八十字流のちなるも一つふらう

海月松を

岩山花のちなるきをみるは

せくらもすうつちみちうきうけう

心づのこ

引ひともいれうひとも秋の泡の

流せろうけうよとこの川あは

山家集を

このまに冬にせうしをまきたる

流るるはうつむ山陰の尾

流るる

流るるも物作はあはれ一池の面の

もみちにはあきうのかれみちうけう

流るる

心して流るるもさそほぬあはれ

流るるがよれつちるもみちには

木枯

七みちにはもさそひつくり軒造き

松をこにかきこかたしのかた

是等

流ぬまを花とやいはれ誰かみち

すあをか九のくせのあきと家

あうくとは思はれせんも死出の山

白ことしはくらくるを紙しき

月本問友

へびとらまこ心かみえとらんしきは

月本問友、ぬわりの友のかし

松弓月

わあしくまつの木の前をとりかたて

うらみ顔きき秋のよの月

山月

山寺のまつくし上は紙すまを

こころのわかくしあむる日こま

〇今南の河原部、同書即ち長崎の合意あり

規の龍玉、歳干と婚の中、一二冊をいさひのさう

三十六人集

十一冊

展覧会、後本らるる大の肉魚書

為るる肉魚の出入あり肉魚と

本、龍寺の三十六人集を是るる

つ考、澄しける人き、此本本龍寺

本と、龍寺しける、此本龍寺

乙、瑞と、十一冊の内一冊、歌、他、

き、

集古帖

七帖

本邦最古の墨蹟を輯めたるもの

此帖を冠冕とす。寛政九年、昌平北條
鑑の上石様。係る市物、得る零帖
をえんと、こんと續帖(二帖)ら、具備
しあると、うれし。日本法帖の大
親を心ふる。と此帖、通す可くす。

事拍果名款論

一冊

七冊、下ろすの、不為、多本、あり、と、
入ん、序を、後、し、と、え、と、自、分、ら、
ぬ、の、と、酒、中、執、と、著、つ、し、に、因、し、人、の
偏、重、の、あり、て、酒、を、ぬ、ら、と、酒
の、部、に、特、に、力、を、入、ん、と、え、と、あ、る、

の、と、え、と、一、笑、を、見、し、に、著、者、と、新
井、龍、村、の、あり、

○舎、建、ハ、一、別、府、に、在、り、と、附、也、を、お、歴、し、
折、し、の、條、え、の、と、あ、り、と、ある、一、口、物、の、郡、を、自、
車、に、う、け、の、り、物、の、著、と、法、と、ん、と、ん、終、と、果
さ、り、り、し、こ、と、と、と、り、其、の、た、と、き、の、由、に、
左、の、説、を、あ、る、

九、お、ひ、み、り、先、が、想、を、せ、し、女、の、を、為、細、り、と、
得、を、只、今、の、別、府、の、海、岸、を、配、を、拂、け、と、
術、の、執、ら、と、し、な、ら、し、く、先、の、的、の、法、と、
り、あ、る、と、あ、り、と、大、の、法、と、日、何、い、と、

河内田所より云、此の被造し志を以てん
た、寧ろ府の流るる廣瀬の怨霊の爲め
挽に殺さんしと傳く。是れもつげたる大和
の石と九州とを河内と云ふ因縁の多きを、宇
佐の八幡の山を東大寺と云ふ深き関係
と考ふることは、さうも少くも、此の流る
良し深きと云く評せらるる、その六、流る
し、ゆゑの如い、さうも、流るる、
さうも、又、大方、あるの、云、此、流るる、つぎ、を、
二、中、上げ、る、さう、古、制、の、石、佛、を、以、て、
此、題、と、お、集、る、さう、か、その、石、佛、の、三、号、の
形、式、を、も、る、れ、本、号、と、賜、傳、せ、嘉、隆、と、同

根、を、考、へ、る、三、基、の、蓮、花、上、に、
有、之、る、ん、が、法、隆、寺、に、花、を、
中、の、三、号、佛、と、號、す、形、態、
は、本、邦、の、他、を、例、と、し、
一、号、石、佛、中、の、一、号、一、所、
蓮、花、上、に、お、坐、せ、る、者、
支、那、印、の、形、を、採、り、
本、邦、の、石、佛、と、二、個、
の、地、方、其、一、の、形、
其、二、の、形、を、採、り、
の、の、と、確、し、
此、の、印、が、板、を、

いさる圓えい為しや云助考の康をいん
ひまありししとのこあそそそことと略し論無
き不とあし、由あるあり

○昨早大の維持費令に教授増給案未に伴あり
る増給増額案出づ、これと早大の重要問題也
教授の俸給の低きも官設の校の是に比し
半額位の差あり、是を同級に近づくるに
今のの事あり、提案は僅り二割増として一
ヶ年九萬圓也、えんて新し月謝の増額も大子
部に於て從來九月(年額)の高百二十圓と
の案も他の学科に準ず、如斯き笑元
の増額の考量と要す、而して新大若くは

一ヶ年二の量に異なり、教授の増給を僅る二割に
しすとせば、そのの大方も犠牲也、其の
果に於て償ふ不あること、教授の二割の増給を
得て生活の安定を得ることもあり、依然不
満之状態も、其の思ふに、南高者の提案も
可とす可からず、余も其の増額の能くは元
ことを測り、且つ今に於ては、^{基金}下の為
のことも、有切に感ず、利権何考の方法を
以ておあり基金を心するも、教授の生活
の安定を得せしむる能くは、^{基金}下の為
費と利権或る程以上増す可ること、今
二割増給とせし、更に一年と出ずし、増

鉅公過焉。鴻儒碩學。訪焉。不物之名。何所取義也。以全
親之。昔者物俱未曉。遂乃以直明命。春成之意。每乃
類此歎。蓋其明此果得。而始書之。記而始書。今余
不文何敢望。物也。然不物之義。則揣而知之矣。凡
物大而廣。不如小而精。鵬程九萬。時不免為鳩之笑。
八方法門。別有教外之傳。均之書也。哀然巨冊。未
能百千卷。而文棟溢堂矣。翻之冊。則累萬卷。而有所
春成。當自刊書。五石鏡。其其所集。亦或達十卷。
今皆廢之。更莫中箱。袖珍。校索。多年。并為上
數千冊。冊小者。不盈寸。又其書。即已踰千數。而函鱗

比。然滿架而不以自是。遠索于禹域。惟不故。易為。唯
精。故有用。春成。命名之意。其在此也歟。飲春成之
壯也。酒豪自許。飲不擇醪。膠大碎。淋漓。此氣。如虹。
談及國事。則軒眉。抵掌。有不可一世之概。今則壺
角。消磨。溫恭。自持。有時把杯。酌微醺。而止。然亦
非。醒不敢飲。則不物者。殆春成。自道也。夫東京
固人文。淵。教。大家。巨匠。豈無記之可屬。乃遠徵之。於
鄙。之。子。者。蓋以。題。表。以。平生。莫。余。若。也。故。付
度。其。意。為。之。記。唯。恨。余。文。之。不。物。耳。春。成。名。海
克。越。後。人

味を投するものも香らさざるものもあつた。家も四圍を
所するものも大部の山物と焼くこと七出するが大部
の山物を和物とすゝるものもあつた。氣味もあつた。せん
傍りもあつた。日この葛集の大部の山物もやり
切れぬ。買つてみれば、換装せん物も得る程だ
の山物の丸も多い。六零碎の七のまじりり
出さ多く、せん、自分の味を投する場合の
いれ物もある。出来物もある。少くもつて、有
んばものことお書きなす。堆をさして、こゝろあるが、
わしく書つた。このころと容あつた。市備も現
ぬ。その山物と珍本とまゝ。山のまゝ。二三十
年前のこと。がうにある。やういふ。今も稀本と

うつと培ふ。自分の日。口購ふ。ある。北。範圍の
過ぎぬ。例へば、古き。敗木。の。存在。せん。今。楊。好。の
七の。さ。く。さ。の。い。その。原。標。本。を。焼。く。と。ま。の。位。を
書。く。と。あ。つ。た。然。る。と。い。ふ。か。つ。て。さ。う。い。ふ。得
難。く。う。の。た。大。体。す。の。四。五。軒。の。お。店。を。漁。り。し
つ。て。得。る。所。の。僅。く。ま。二。部。の。三。部。の。こ。ま。の。名。も
ま。ま。と。一。種。七。年。の。入。り。ぬ。こと。も。あ。つ。た。併。し。回。出。を。漁
り。と。先。に。物。の。や。鏡。標。と。考。へ。換。る。と。ま。の。得。る
何。う。あ。つ。た。あ。つ。た。と。ま。の。北。界。印。の。身。味。の。あ。つ。た。の。も
せん。心。遣。う。ま。出。し。つ。た。の。も。あ。つ。た。前。の。何。も。無。つ。た。の。も
へ。出。し。つ。た。の。も。無。い。と。略。し。知。り。あ。つ。た。換。る。と。ま
え。張。り。あ。つ。た。の。も。知。り。ぬ。と。ま。の。身。味。の。出。し。つ。た。の

常りと早稲田の圖書彼の以て七八篇の和漢書を蒐
めりて各々其の書名を以てしひたりることあるもの
多きを多く記し居るもの、その中に自らの書物を
集めたるもの、その一は彼の以て集めたる同様の書
を更に購ふこと、何れを以て而して成るもの、その
を避け、彼の書に無い換ふものを自ら購ふ換ふもの
である、これらも其の集りしに三千冊(寸本を除き)の内に
多分彼の書に無いもの、二千冊位もあるであろう、
一は其の書を早稲田の館に備へた換ふもの、まづい
らうと不備な書も、さうといふべくぬ、全体和漢書と
して、凡そ其の書、西日本と念し、ことあるもの、日
位手を入ることと考へるものと、採りたるもの、

圖書と其の無限根本圖書を以て限るもの、末
に其の書を多くと無限とも云ひ得る換ふもの、自
分の書を集めたるシステムを以て集めたるもの、
其の書の即興を以て集めたるもの、其の書を以て
實り其の書の都門とあり、その方針を以て集め
たるもの、傾注する方、その書の、その都門、
纏りたるもの、その書を以て集めたるもの、その
ハ、その書の、その書を以て集めたるもの、その
その書を以て集めたるもの、その書を以て集めたる
一、殊に其の書の、その書を以て集めたるもの、
其の、大体自家の趣味を偏して、その書を以て集
めたるもの、其の書を以て集めたるもの、

大正元年度下	二二〇。九七七九	一〇。四三三	二八。七三四六	七八
全二年度上	三九六。八七一六	一八。三三四	一〇。九七九六	六八
全二年度下	三〇三。七六一八	一七。六五八	二。四六七一	七六
全三年度上	二九〇。六一〇〇	一〇。八五八一	九七。一七八〇	六四
全三年度下	二八三。〇三三九	二四。三四一	一三。五三二	八三
全四年度上	四〇七。五二九五	二四。三三〇	一三。三三八	八八
全四年度下	三三三。四三三五	二八。三三八	三三。八二二	八二
全五年度上	八四三。三二八〇	一六。五三六	八七。五二〇	四
全五年度下	四六五。四〇五五	三三。八七三	一三。三九〇	六八
全六年度上	八三三。七七七〇	六二。一六九	一九。八三三	六

十二

年度收支利益

大正元年度下	五五八。一六四〇	一六。四〇七	一五四。七三八	八六
全七年度上	三三〇。八三七八	五三。四七一	一七。七四二	九八
全七年度下	三三三。三二四五	三九。七三三	三。四五七	二
全八年度上	三三六。六八四〇	二九。七三四	八三。九六六	七三
全八年度下	三三〇。六三三四	三三。六六一	三〇。三二五	二四
全九年度上	四一三。三九八九	四二。〇三六	四八。四六五	三〇
全九年度下	四四四。七五四〇	四三。四五六	六三。三九五	九七
全拾年度上	五〇五。四四四〇	四三。五三七	五九。五八六	四一

年度	資本金額	増資	建物増築	機械増設
明治十年度上	一二五〇〇〇			
全下	一五〇〇〇〇	二五〇〇〇		
全甲三年度上				造板菊全印刷機一百 石版四半印刷機一百
全下				造板印刷機四全百 全菊全二台
全甲三年度上				造板菊全印刷機一百 造字鑄造機一台
全下				造板菊全印刷機 二八台
全甲四年度上				サミット造板印刷機百 造板菊全印刷機百
全下				造板菊全印刷機百 造字六ホイン増設
全甲五年度上				製字工場一部増築 全菊全二台 全八頁 全一 全一

日青印刷株式會社

年度	資本金額	増資	建物増築	機械増設
大正元年度下	一五〇〇〇〇			
全下		三五〇〇〇 (勸銀借入)		造板菊全印刷機一百 全四全 全菊全 石版菊全 一台
全甲三年度上				
全下				
全甲四年度上				
全下				
全甲五年度上	一八〇〇〇〇	三〇〇〇〇		石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪)
全下				石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪)
全甲六年度上				石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪)
全下				石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪) 石版印刷機 (木造三十全坪)

年度	資本金額	増資	建物増築	機械増設
大正六年度下	一八〇〇〇	早興業銀行借入 四〇〇〇〇		
今七年度上	〃			
全下	二二〇〇〇	四〇〇〇〇	王取印刷室(平家大建) 寫真銅版 印刷 凸版製版設備	寫真銅版 印刷 凸版製版設備
今八年度上	二五〇〇〇	三〇〇〇〇	防火壁の設け	自動給紙付輪轉石
全下	〃			自動給紙付輪轉石
今九年度上	三三〇〇〇	七〇〇〇〇		
全下	〃			
今十年度上	四二〇〇〇	一〇〇〇〇〇		三色印刷機下置機
全下	〃			三色印刷機下置機

日青印刷株式會社
十二

年度	資本金額	増資	建物増築	機械増設
大正六年度下				
全下				
今七年度上				
全下				
今八年度上				
全下				
今九年度上				
全下				
今十年度上				
全下				

改新機 二台
 針金綴機 一台
 自動研磨機 一台
 全副少機 一台
 丁合取機 一台
 表紙付機 一台
 排紙機 一台
 震動機 一台
 柳老タカ 一台

○十月十日 書寫義彦上京并中山ふら坂本
 嘉次馬也親也(吉田有但坊士地) 辞出細冊刷
 本方行の件、協成す、宿刷の作書、其の
 紙の如くも、或る程、其の行、其の決、其
 七、其の分冊、其の行、其の決、其の假
 リ、其の本、其の行、其の決、其の假
 本、其の行、其の決、其の假
 其の困難の事、其の行、其の決、其の假
 其の事、其の行、其の決、其の假
 リ七冊(内一冊、其の行、其の決、其の假
 く各冊、其の行、其の決、其の假
 二十日、其の行、其の決、其の假

大日本地名辭書

(第二部各説篇)

畿内

邦制上の舊區畫にして、京師近接の國を云ふ。
 大化二年改新之詔、其二に曰く、初、倭京師置畿内、
 凡畿内、東自名懸、横濱、伊賀國名懸郡、以来、南自
 紀伊兒山、紀伊國伊都郡、以来、西自赤石、柳瀬、播磨
 國明石郡、以来、北自秋、波合、坂山、近江國滋賀郡、以
 來、爲畿内國、(書紀)當時國郡の制未定、其の所あり
 けるに、其四至を備載して、分國の名を擧げず、然れ
 ども其の境域は後に至るも之に仍り變更する所なし。
 持統天皇の時、四畿内の名見ゆ、(書紀)大德河内、難波山
 背の四國あれば、(書紀)二年和泉監を置き之を國に准
 じたるを以て畿内五國と稱す、(續紀)養老五年左右兩
 京及畿内五國「尋て、芳野監を置く、乃ち四畿内二監の
 稱あり、(續紀)天平四年、兩京四畿内及二監」二監底に
 置し和泉國を置くに及び五國を爲り後世復變更なし。
 或は五畿と稱す、五國なれば也、(續紀)天平神護二年
 五畿内巡察使、(○)承和三年、畿内の國次は承前例大
 和を第一としたるを、勅して新式に調り山城を以て第
 一に處らしむ、(續日本後紀)延暦中、大和より山城に遷
 都ありし故也。山背大德の字を山城大和に改め、難
 波國を攝津國と改めたる等は、各其條下に見ゆ。
 畿内の地形を按ずるに、五國の地は全く難波に注ぐ
 所の一大水脈(淀河及大和川)上に成る、邦制の區分頗

山城國

山城國 山城は本那羅山の陰、泉河、(宋津河)左右の
 地なり。古字山代又山背に作る、實にヤマ
 ヲシロの義なり。(相樂郡山背參考)國郡制置の時、野
 字津等の地を併せ山背國を建つ。○延暦十三年桓武帝
 遷都あり、佳字を取り定めて山城と爲す、其語に曰く
 「山勢實合前山云々、此國山河帶自然作城、因新形勝
 可制新號、宜改山背國爲山城國」と。延喜式、山城國
 八郡。和名抄山城、夜鳥之邑、菅入郡、古今異なし。
 此山城と丹波の國界は水尾山、雲石山、大慈山等時に移動
 ありき、(各條下に見ゆ)之を要するに丹波の東部、桑田

京都

京都 今京都市と曰ふ。桓武天皇延暦十三年甲戌、葛
 野郡宇太村に地を相て皇居を造り、京都を建て
 たまふ、即是地也。皇居は南面して、左右に市坊を置く、
 中央は即朱雀大路なり、(續)して平安京と曰ふ、其古規は
 下條に見ゆることし。而て其皇居并に大小の邸宅市坊

(1) 畿内 山城 京都

○十月十日 書 爲義彦上京并中山ふえ坂本

山城 京都

(2)

の移動は歴世あり、故に都色の地域亦變更あり。大略を以て之を論ずれば延暦の古規は左京加茂川の磯を東限とす、之を東京極と曰ふ、今の寺町通りなり、右京は鴨川、四河を西限とす。然れども右京(名西京)は初めより宅舎多し、中空間の地なり、故に毎に東京、京即左京の盛を稱したりき。天慶年間東國諸國に遠征大に起り朝家は之が討伐に心を傷めたまへり、一説は平治と雖も京師の勢力は漸く衰へ、村上皇の天德四年大内裏を築き上皇御親政す、至る、皇居は之を修築す、之を復元の舊觀なく、而も別殿一棟の朝に皇居額に火あり、火あれば之を離宮別院若くは外戚家と違けたまふ、謂はゆる里内裏是なり。此に及び律令格式の古法すでに破る、一同く、京制も亂れたり、後三條院の天子は開院に御座りて萬機を執行したり、是より白河鳥羽の兩帝之につきて政務を院中に遷す、當時即白河の御所は愛宕郡栗田郷一面に建築せられ、當時京と白河を并稱して京白河の語あり。鳥羽帝の城南離宮(鳥羽に在り)は都遷してと疑はれたり、六波羅に遷宮の事起るも此時代とす。既にして保元元年大内裏の遺蹟あり、越ゆる二年源平二氏の争戦起り、平治の亂、大内裏は其廢墟と爲り、治承元年京師大火、内裏も免れず、一圓に燒野原と爲る、平清盛之に乗じて應仁(津)の別荘に遷都せんと擬す。此遷都一時の事にして全く成就せざりし、尋いで安徳帝平家一門に擁せられて西海に落ちたまひ、源賴朝兵衛の權柄を握りたるより天下の形勢一變し、延暦の古規は政治上にも都色上にも亡失したり。

代に至るまでの禁中の基礎を定めたる者にして、爾後五百四十年は實に之に因襲す。且足利幕府の邸宅は一條以北の地に興りしを以て都色の状態を遺し、延暦開始の左右兩京は一轉して上京下京と爲る。應仁元年細川山名兩黨の京兵隊に亂入して相戦ふ、細川方は十六萬山名方は十一萬と稱す、兩軍日夜抗争火を放ちて殺傷を絶えず、應仁元年京師全く焼土と爲る。應仁時記に「二條より上は北山東西悉く燒盡となりて其殘るは將軍の御所ばかりにて樂山仙洞も陣屋と爲る」とある者也。應仁の一亂に續きて戰國の世と爲り是より一百年間は京師衰微を極むるの時にして、織田信長の足利に代りて政權を握るに及び京師初めて蘇生す。豐臣秀吉更に修造する所ありて京師此に改新したり、秀吉巡視の當時其光景は、高倉通以東は賀茂川東山まで渺々たる耕作地にて、西は大宮通以外田野遠くわたりとぞ、斯くて秀吉は先洛中洛外の區分を明にせしめ、民屋雜居の寺院は東京極に移し之を寺町と爲す、大抵今の京都市區は此際定まる。豐臣氏は京都に修造するのみならず、伏見に大阪に修造する所あり、其正交線より延長にわたる二三十年は畿内繁盛の狀相ふべし。而て元和の中豐臣氏亡び徳川氏は専ら京師防禦の手段を取りし、海内昇平の氣運は都色富實の勢を屈せしむる能はず、京の町々は早く西は大宮より東は賀茂川を渡り北は北野舟岡の邊まで開け南は伏見に連接する事となる。戸口は年々増加し延寶より元禄中に無慮五十萬に上ると稱したり、爾後稍屈する所ありて以て近時に至る、王政維新の前夜數年は將軍諸侯の滯京ありしを以て不時の熱鬧ありしと云ふ、而も江戸運部の後には亦故京寂寥の狀あり。

く、賀茂川を挟み其東西に流る。上京は北に在り下京は南に居り、三條通一帶の線を以て之を分つ、之を總べて京都市と曰ふ、東西凡一里半南北二里人口凡三十五萬とぞ。平安京 京都の古名にして延暦遷京の初めに詔ありて平安京 此號を建てたまふ、木田ヒロ後世通じて「イアン」呼ぶ日本紀略云、延暦十三年十一月廿二日遷都新京、廿九日詔曰葛野乃大宮地著山川毛麗久、四方國乃百姓乃多出來乎毛便仁之底云、此國山河帶自然作城、子來之民謳歌之聲異口同聲曰平安京、今宜國之。類聚國史、延暦十四年正月十六日詔云、山城國桑原縣、帝宅新成最可憐、都野道平千里、山河擁護西國邊(新京樂平安樂土高年春、冲積乃吞八方中、不日災開便觀宮、壯嚴殿規傳不朽、平安作號無窮。弘仁四年上幸南池院、右大臣藤原人上、取けよの日の池のほとりに郭公たはらば千代と鳴はき、つ。延喜式、京程南北一千七百五十三丈、東西二千五百八丈、通計東西兩京、自朱雀大路中央至東極外七百五十四丈(東京也)西京準之。今於芥抄京程圖及山城名勝志、京之水等諸地誌により古京の規模を見んは大小の條路往々依然たるもあり、又古今尺度の長短を比するに古尺は今の九寸七分二厘許にあたりしと云ふ亦以て于古の舊を思ふ事なり。平安通志云、舊京城今尺改算、南北凡二千九百二十一間東西凡二千五百十三間、幅七百三十四間二千八百歩〇線の街路を東より西に數ふれば、京極、大路(今寺町通)富小路(今鉄屋町通)にあたる、現稱の富小路

めもろく、まをさるる、其意を漢文の行状を
録す、まをさるる、まをさるる、此の辭出の著心注、其
意の苦心、任歴、余接、まをさるる、まをさるる、叙し
まをさるる、終志、附する、まをさるる、まをさるる、
〇余、〇日本法者、〇葛集、〇和刻の支那法、〇及
〇人、〇多く、〇和刻を、〇卑め、〇まをさるる、〇日本に、
〇存する、〇支那法、
〇往、〇彼、〇と、〇交、〇り、〇し、〇我、〇ん、
〇の、〇後、〇利、〇の、〇日、〇本、〇に、
〇成、〇る、〇も、〇の、〇珠、〇貴、〇の、
〇値、〇を、〇、〇又、〇彼、〇ん、
〇の、〇敗、〇を、〇比、〇し、
〇我、〇ん、〇の、
〇敗、〇の、
〇優、〇を、
〇ま、〇の、
〇決、
〇し、
〇之、
〇ん、
〇無、
〇き、
〇ま、
〇の、
〇可、
〇ら、
〇る、
〇也、
〇此、
〇頃、
〇和、
〇刻、
〇の、
〇孫、
〇を、
〇産、
〇出、
〇す、
〇二、
〇帖、
〇を、
〇得、
〇て、
〇玩、
〇賞、
〇す、
〇一、
〇日、
〇天、
〇保、
〇身、
〇百、
〇の、
〇刻、
〇に、
〇傷、
〇り、
〇母、
〇を、
〇見、
〇海、
〇局、
〇の、
〇敗、

あるもの一と山年三井源左之門古るき版を
得て副行日好と銘するもの即ち日下
神日版あるもの一と元祐二年河東
神氏模刻と帖尾に後修あるもの一と而し
て二帖を対比するに三井本大い優るものあり
唱雀の跋に見るに此版伊勢松茂より出む西
京吉河克尾の巻を以て終に三井家帰
すし唱雀は神天壽の刻本と云ふもの
あり、惜むるに敗荒干腐朽しし種あり
る貫名本を以てするに、蓋し宋本の面目を存す
るもの此帖にあり、傳言彼流の本に比して一書
上に出る所以六こころ在り也哉元末我法書界に松

と稱する此の法書二部あり、此に元祐二年薛
氏の模刻する一と伊勢東庄の帖するもの一
ハ貫名海庵の帖するもの元々、前ある今
も伊勢ありて存し後書を入り日下部
帖に依つて花を以てするに、廿五に海庵の海
庵の跋あるもの一と伊勢本を杉本某に刻せ
しものもの也而して三井本六部を以て回す
るに似たりとも刻を遠く杉本本の上にある形
神一ある本を亂るものあり、但し唱雀帖を
舊海庵本とするもの伊勢本を以てし、其の
優劣ある未だゆりくを待する、吾ん概を待せ
皆在之んを见人ことを能すとす、大正十年

此帖長かく得るをかくとふふ得る
之持巻をまじりて堀傳自筆の題紙
あり相果は遠く

古村印書二集

家藏に此印諸前集三冊あり傳集

雜物三々也

文布

油谷傳文子の伊勢保紀新集の歌
集也久しく得んことを既し初め

得たり

段三(三)尾山譜

家藏既三井本海尾段又あり

あり、此本揚守敬花下也而自家
花二本と曰しうらり 初冊の用
紙せんとも懸ふ書巻をらんといふ
義を尋るを據りて漢書し以て之
以字刻也

釣客傳 何三本

合一冊

吾王幸因宿傳をも釣の珍奇
として此の二出の目とせり、此
の本は伝といふ義、尋るを據り
て以字本也

十二月十考記

日本法帖を集めて漸やく行き法才る未也

—くろ、山をひらきみるころ
時をゆる山を—みるは心ざらん
ぬれ透るへく思はるるかち

あ—ひまの六圓の川お流る
—ぬ、にぬれを我らひとり流し
山玉の川のくまわにまつきりりの
そに恋あんか夢にんえりつ
わまぐしの川の瀬まきまつお流の
まちあうつて思おも—せぬ
あきま—く老いあく山の岩あゆませ

つ—にちあまがうおまらう
おまきをま—れるかちあつあつ今の
木ぬぬ—つうん鳥うまう

大徳寺の遺蹟自性寺(大分)に
庭とおちくらのひ、きをき—しは
あらうんりてよぬあやうせむ
大徳寺—いまあははあ—は—ぬぬ
か、に—う—入き寺らうう

○前に綴しつる大徳寺の遺蹟自性寺(大分)に
ゆきまう紙—は—は—ぬぬ

○大宰府が今宵の二の虫ねと数音の虫ねを
鳴らした

親世善寺の徳古

この鐘の音のひびきとあまの

きこころがけきこいこい

いれづきの力をあまのつと鐘を

黄のあまのけをきこゆやくら

いれづきのたちかろこを掃るかねの

即善のまねさきのはま

鐘つきをくわうてあまのきこい

かくらばあまのたね

ひささの月は毎びみつる

旅中々わねをーるひもか
よのうはさひしきこものをもち
旅中々あはれんとおもふ

○今度八朔大宰府へ：遊ひ其の祝祭する所ちり
くちあやうしし 行をのきき五六ある連後者
きつけらるものもききしとせんが四五枚ある
とらる一丈論も見るを得ずし、浄土一程の
持論あり、その持論を破らめるの撰入らを得れ
るに津あんとん次の日暮る所旅行也、津あんと
後とる日を旅中りい消すとのまあらさる也

十二月十日録

大宰府にまゐると親世音寺と戒壇波と都
府揚址と天湯宮とを親し、親世音寺の
僧お生と河のそと、昔らりしと浴保るや彫刻
のきやとえんりこそと、寺僧を捕へ七位佛
の印おを浴解せしが、おあらふらる、
鐘撞とらるる者官の年の特鐘をつけ休
の年の遺の考の心もすあわづし、此鐘と
親又すけんとる原者の文物を焼く
し、かきし、幼全形を相難式とす所増
手頃のききるききものうと、寺僧の扱をい
をいし、あをいしと、浴解えんと及つて
親世音寺の東北に一社あり、俗に問くは

鎮守も八坂控をうと考へ即ち又これ祀
社もいひきやと又今秋法隆寺村に
時神輿つをかつてし出まきと秋祭と見え
故に法隆寺の儀を其祠を以てあそむん天
神の祭事とししころ天神を聖徳法王
の院いまこむらふとすしころ俗もさんば
らそ中法に祭神の要うなるを打天ひ
そす
神持も代御あり寺に鎮守あり
こ佛の神に代りし位仰上の式器を
有しそ即ち征服者の被征服者ニ
す氣血の形式を存し其形式の皆後を
透視する時初めを原始の位仰の實状を

知るべく八幡を天祖天皇とすといふ
説のともなく論じしころやとす
言せしむるころは八幡を神の皇位に
しとむいぐたき字をありて佛友
ハ幡といふ名を得るころの事と
天皇を天皇を其胞衣を埋めたる
故に法隆の天祖天皇の祠とて説く
の圓形着筆のいひ昔も胞衣を埋め
神功皇后の位しとむとす此所
あるも解するが邊に自然の論地
そす又幡柱をいふすもその
故にす一柱の stone worship 解

要取を位れしとの好のあらむのよきと云ふ
馬柴のよき 大宰府のありて一途の情は

乗しん天祚論を説き来れば
あはる所をいふまふれを
一毛もをともめし

又云戒壇院の觀世音菩薩の西のありて
唐僧鑑真大師の海を東大寺のありて
某の寺のよきとおもふ日本三戒壇の
一と稱し日羅来り鑑真菩薩のたれおの
公此新院と稱し文化の地なりしこと
えと此も見えしこと観世音菩薩
於ける十数祀の因寶佛作のありて大六の

主像四祀丈六寸像一祀のありて
いへも七八尺をありて其最上といひ
へき聖觀音の端のありて天にま
たはるるありてかゝりて佛のありて
佛像のありて東大寺といへも
べしと云ふと實なるも無き此寺の金
濟をともめしと云ふ

大宰府戒壇院追憶

いにしへのとけのよき礎を
わたをいふありてつら
昔あとのをぬくこと
思ひし人をよきよし

わいすみと君がみしと都府梅の
いらかしくゆけりそよみたる

汽車中即目

はらるるふ暮のうしろの海原を

帆船のきあふ肥後の浪打

○今宵ハ一とて説中の一とて其のそよみたるを
三四枚に折れりある七又の記をあり試み五
十枚入二冊のアルハムに明次装束し既二冊
に充てり、今宵説中の一とて自らその
説を説き又旋縁の手控をし、先生に
寄るべき縁をいさし保石をいさし傳の借法を

動すといふ今宵、海原の消息を保存するは
軍り此の爲ある故りありとありと也 十二月
十九日 志

○大隈先侯大患の終後回復操ふるを
そとて病に苦しむる者あり思入るる室
を同小して者夫人の臥す、これ先侯の病を室
助長するものありや、先侯は元氣を致し
するの道ハ人に接するの機を心するに在り而し
て夫人の侍を臥す、これ又其の妨礙に
き得ずと、先侯は、大患後病を床に
人に接せしむるに、先侯は、病を床に
の病ありとあり、
後、
人、接するを

平素

日あるは七開け放ちあることあるは一禮をす
べしと氣持ひ置居れど、さうく候の儀流切り
湖をく約立分科りて漸ゆく振う向くの儀を得
て一禮を為せぬ、又人々如流漸ゆく向ふに、此の
席上にて一七指らん、候と曰く、番頭も俺も、若
苗の如きは終に勢いなり、俺もさう若い為め、
漸ゆく回復し、こころを、さうと曰ふ、番頭
といふ今も、候又曰く、俺も、さう回復し、
いさう時々自分の記帳力を、験して見るべし、
み憂り、無いさ、敢て悲観を、さうと語ら、余
も、前日候の主治医、福田博士、さうと云き、以、
候と語ら、曰く、大退候の、さうだ、珍らしい、

いさう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
愈やす、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
へし、こころを、候と、得、さう、俺も、さう、
医者の門に、お入、所謂、門前の、さう、と云ひ、
候と、さう、文、明、場、分、の、さう、を、さう、さう、
と、覚、し、文、明、場、分、を、俺、も、さう、畢、生、の、事、業、
と、さう、云、ひ、且、つ、自、分、の、疾、も、一、月、中、に、回、復、
す、へ、き、こ、と、と、分、り、共、に、さう、云、ひ、余、も、
り、候、の、病、氣、を、今、の、不、幸、さう、保、し、努、力、し、
茶、張、り、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
カ、こ、保、し、さう、中、編、割、裂、の、心、洗、を、報、す、候、亦、
東、西、天、明、の、初、紀、論、を、早、く、纏、め、上、段、す、る、の、

素あるらしく、文的場合のものと此に先流七位者
を以て云ふ所の侍言を余もしるまを侍士に脱
福の速うをんことを促しつてあつと生け流福を
早大出版部に出版するの意を云ふことを云ふ
侯の安心を侍見と擬す、侯を曰く印方批多子
をも涉福せん心は赤らうし七後福を多うあま
遣儀をう者きやうをい福を、侯を又あきり
歿し比人を教へて田中(守屋)七五ん比云、紙の
の板をどうか、案を再入比の教するも及ばな
うつ比、安田(守屋)と比(守屋)を以て勅書
する不うあつ比か、あまやえん比を、語り出ら
る、僅うん十合計の字に、候の字に重なる候を例の

こころ一行の力をあしして指す不をん候 強うえ氣
無しと云ひひくき家あり、毎の候う流お手と云
候を以て候々の辨を吐うと云ふは氣を教し
病を差あふ一法をん歎、余を以て候を云ふは何の
うも見さるんは春上まうしと云ふは辭し去り比
り、實に侯は病を治すは此の其の考定も
る候し候こと云んは常感文に余う胸中、往
來せり
口筆候も同云流うを流も、うも二三の回
云を贈ふ

道元禪師の圓信像 二幅
繪巻物本の板本也 珍本と云ふ

名珍牛と系傳の得換に係る所余の
り注意を惹けり。家系記の自説
賛一語あり、此の語あり、會約の云
族の影言して載せあり、悔の事
二十村傳名珍牛あり、會約三人
の狂歌を録し、此語の由来を証す、而
して珍牛なる人いへば何人なるかを
考へ得ず、初め此人の著と觸れ
ハ此の因縁係にありとす、此の條の跋文
の尾に文化五とあり、あるを以てんん
傳るものと目的する事、ゆるしと珍牛
ハ其因宗の傳と相違あり、あつた文あり

ふ名傳よりしこと推する事難
い事也

一 八徳卓遊式記

一冊

此書寛政年刊する下支那神紀の
事も叙するあり、珍本也 卷首に

法人吳成光船中 吳良金在衛門文
の一行あり 卷尾に

牛山殿書曰、金在衛門、善屬文

筆、通各州三言、唐山、雲南、高麗

名曰山生、金在衛門、長崎人也、或曰

金在衛門、姓山西、蓋取中華山西云

とあり、金在衛門の事略、切要し、八仙
卓内、シツホリ、料地、シツホリ

一 魯紙萬葉集解夜

余魯紙萬葉集の事を知ると、
つと大に箱二に開く大に示すまじり
子を以つてせしむる列條綴り美本を
仿し木弘法の後二條のあつた
後より今を大略忘却し、
してその因り多し大に遺るや、
るらと示さん本を辨ふことを得
たり

十二月二十日記

○九物こもる今津の朝を
いさかひに、此頃を女侍の今木多村に玩具

を得て、例の落子強論の研究に當り、
木の葉を移し、新三首をあらわす

このころの夜の長きを
村のあつたつらさるる

まじり姫さるの女こととすはひて
みこころまじりけむ古おせはむ

心さるるころの土極のまじり
いかく世の人をさる

極のるのつらさるにさる里まの
まじりあやまらる土師のともから

朝狩んいまたすらし馬あめ
猿のまじりことは柳のうへにあり

つて致強の世にせしむる

或人世のありあけの移りてを佛の印
象流の画の如しと云う物も一こと有
く、これをもても致と曰成るんは
支那南方の極の玩具の着彩の美
麗をうけしものとして先志のよも
あるに合して無彩ももつて一二人の
繪に要するに投棄のるに居しし所
留玩具の繪に此に好むもの多く
ある如くのあり極にわづらひの
瓦礫の似て移しにるものも、現今
もさるる器物に形を有するもの
一個三つをまじりて七つをまじりて

形は繪由農氏を繪繪字取繪
一個三つをまじりて七つをまじりて
、
紀後日奈久湯のあり
十二月廿一日接到

又日奈久湯泉坊(能本)を今津のをもて敷敷
つきて石の説あり

つては漢の本を一行きん手あるかたは
ありとあり、中し日蓮大士二十八宿日割繪
のあり、えをる中、撰くまう、春西の
Star Map: 比較を、一人をよるこびる
只今に撰くまう、七、かのバビロン埃及

系統の *astrology* (占星学) を定ると比をばより
 ぬきふりしとすまあからあきとありては黄
 の十二星は南向東洋の七のついで洋の七のついで
 ぶの中のかバロロンの七のかを定むるも意味あ
 りとのとれ年々くく、唐の暗黙に十二宮を画
 けるは我邦法隆寺に花より北斗曼多
 羅の女も亦わのん其系統に属するものにて
 明瞭に十二の図様を描出せり、一か七寺塔と
 多くお知りしるるありし多く古物をぬき
 我者もそと満ちせりあるものありて、又 equal
 日蓮大士は二十八宿の星を暗誦してえを月
 配し日に刻りてて感嘆するも案に定

物の天に起して揚して奎と星とをこりて思
 と柳とを定の滑りやゆる凡そ祇代に
 我々の宗家の家を天宮に閑す知彼
 と意味とを録けしものもあきなり此等物
 と揚して大千三千大世界の花を後々来
 りの如き者二人七出ですれ坊札上の論
 をより乾燥する物系道徳論の二歩
 を出ひてさうしてさうして何れをさす
 せりを考ふるも遺成に地なる天孫も天
 上より降臨すといはれり日本名を定むる
 天宮をしくす相如のものを世に布けし西
 方十方億士の速き三千大千世界の衆は

屠龍之夜

二冊

と猪ひ得たり、此を抱一の仇階を自らまこ
 杯しとを割し、酒をこし、餅を軽く親白藻
 とより、序を膳の傍と傳ふ、抱一の仇
 向と一程の風味ある、酒を自らまこ、腹
 下る、おをひて、此をとめ、酒の人をまて
 ぶん今の價、踊る高し、余三年、むさ
 七得んことを、形を託、店に、けつ、まき
 此漸やく、つる、手こ入る、ことを得たり
 價五十五圓也
 十二月廿三日記
 〇中川柳おの花の秋月古香の情を高くし
 あり、示す、よあり、李白懸車、こ、出、入、の、回

華改酒、酒、酔、る、ま、る、こ、金、し、念、指、動、く、終、に
 情、の、こ、家、計、と、ま、る、古、香、今、の、家、と、い、あ、う、越
 後、左、の、め、し

美祿天成、言、情、以、千金、用、是、亦
 還、来、烹、羊、宰、牛、宜、為、樂、一、飲
 不、解、三、百、杯

辛丑歲、お、友、人、於、大、酒、行、素、而
 此、懸、車、流、涎、固、保、也
 古香居士

此幅上、歌、依、由、こ、曾、経、御、説、の、大、印、を、授、す、

家老の柳菰遊園の印あり得るの
七の北印を用ひしと見し 十二月廿四日
○十二月廿四日 坊子湯子園五五六の内一二を
録す

實島長江集

十卷全一冊

正徳五年 洛陽柳菰軒の刊す

不北の今名と稱す 卷首に實島

紀あり

國史年表

文政三年刊 一冊

栗原柳庵の著也 史籍年表

に似て略るるもの

歴史の記録

四巻を録すの本也 假し北の名を
命の史的の和年 傳 柳菰
と歴史に關する註文を換へ
上板し得ることあり 人物の首尾を
多く流石に考板し一々篆刻
六帖に 柳木改題 嵯峨川 祝儀山名貫
義等の著し 字もの一々其の氏名
を彫刻す 或る一板のこのと
りしを合せし得るなり 此を
くいのなり也 國に移るる各紙
皆 舊名を移るるの印を捺す 今此の
版本 歟る稀也

竹外亭の絶

一冊

竹外二十八字詩と流布多しけりとも此
をと稱也山陽の詩あるも此のる絶を
リ二十八字詩と此の絶の後二刊し比
よりの也

〇いしく賀末とらうとゆの絶居の絶礼びとて
うしくらうとあふ似し絶居ととる心、此方よ
りも人に絶ることう也言さんうの絶居方も
軒七あふいひ、昔らう方、夏の日七おと神と
絶居とあふいひ、言さん、絶居とあふいひ、
くも、人に絶居とあふいひ、言さん、絶居とあふいひ、

へいひうらうと化あふこと、絶居ととるきとる
こと、毎年の末の例あふ、絶居ととるきとる
るの、遠く、絶居ととるきとる、絶居ととる
礼状七、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる
く、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
る七、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
を、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
る、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
ふ、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
道、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
た、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる
ひ、絶居ととるきとる、絶居ととるきとる、絶居ととる

物言のつらみはしむとこころ香しいわらわ
の秋の思ひはふたつ二三の若田をうく

字がし

紙の寺泊

飲すし(註)

紙の村上

の月餅

長島

海月

日

ごり

加賀

蟻獨傳夫

紙の刈羽野宮

山のり

椽木野宮

魁の子

紙の

登川

紙の

塩魁

北海

梨柿

紙の

餅夫

紙の

あまは

大改

昆布煮あ子

京都

干魚、山芋

伊豆

の月餅と初めをえとて、木村蔵持のりこをく

清南巻餅大流伝多生暖蔵餠

山下巻一口不流伝(註)のり指次(註)

丹半餅好

十月十日記

口家徳の状況と見えと神田ととておせ、紙産

り、沙州と乗合自動車に乗る回る、利家

築礼法集り、二二三の高倉と物を贈ひ、某

店、酒食等、店況を振り、年末の不景氣系
あるのみ

浦州、土物、淡店、店主、方、右の玉を辨

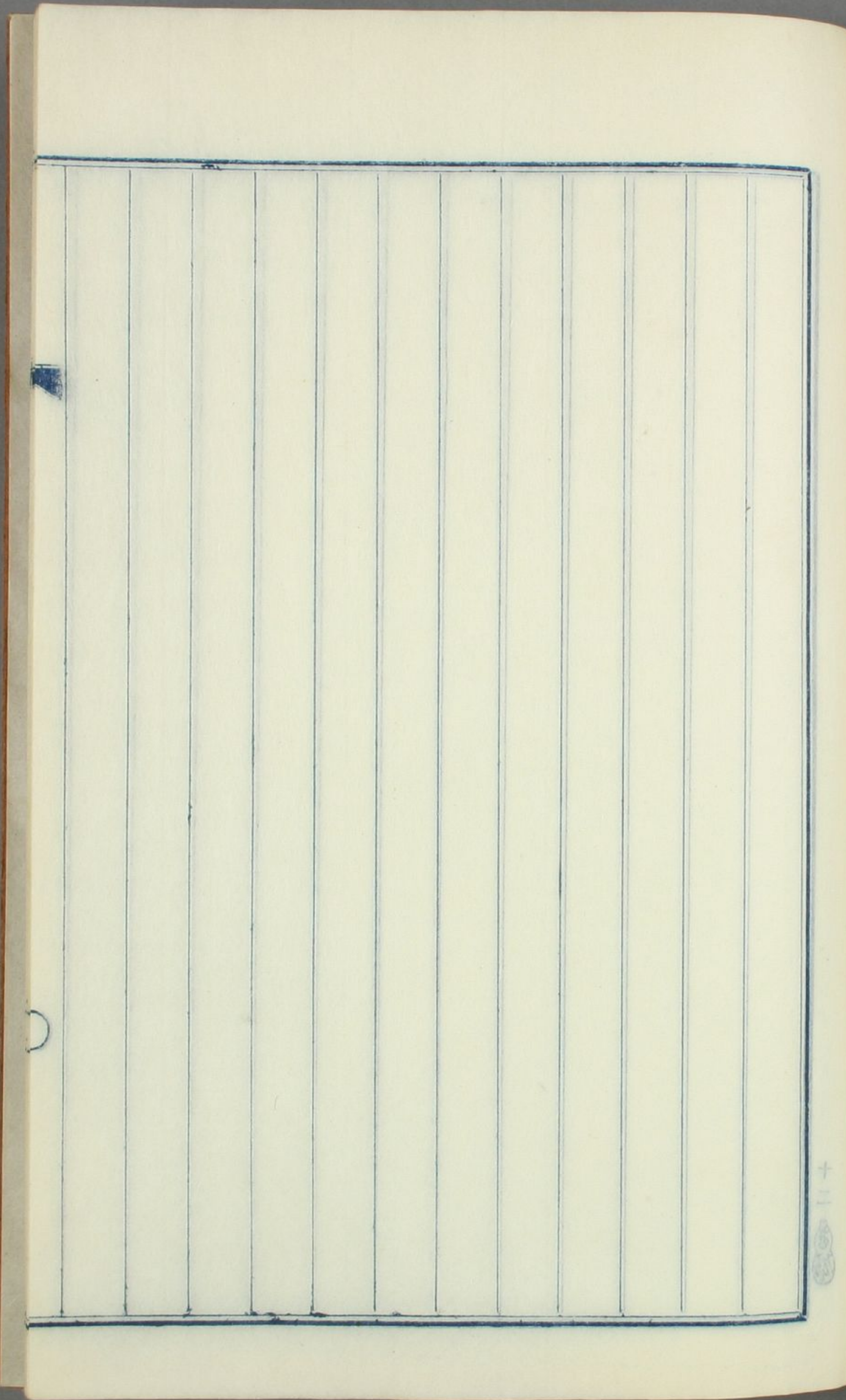
前、不景氣、珠

全部廿七冊

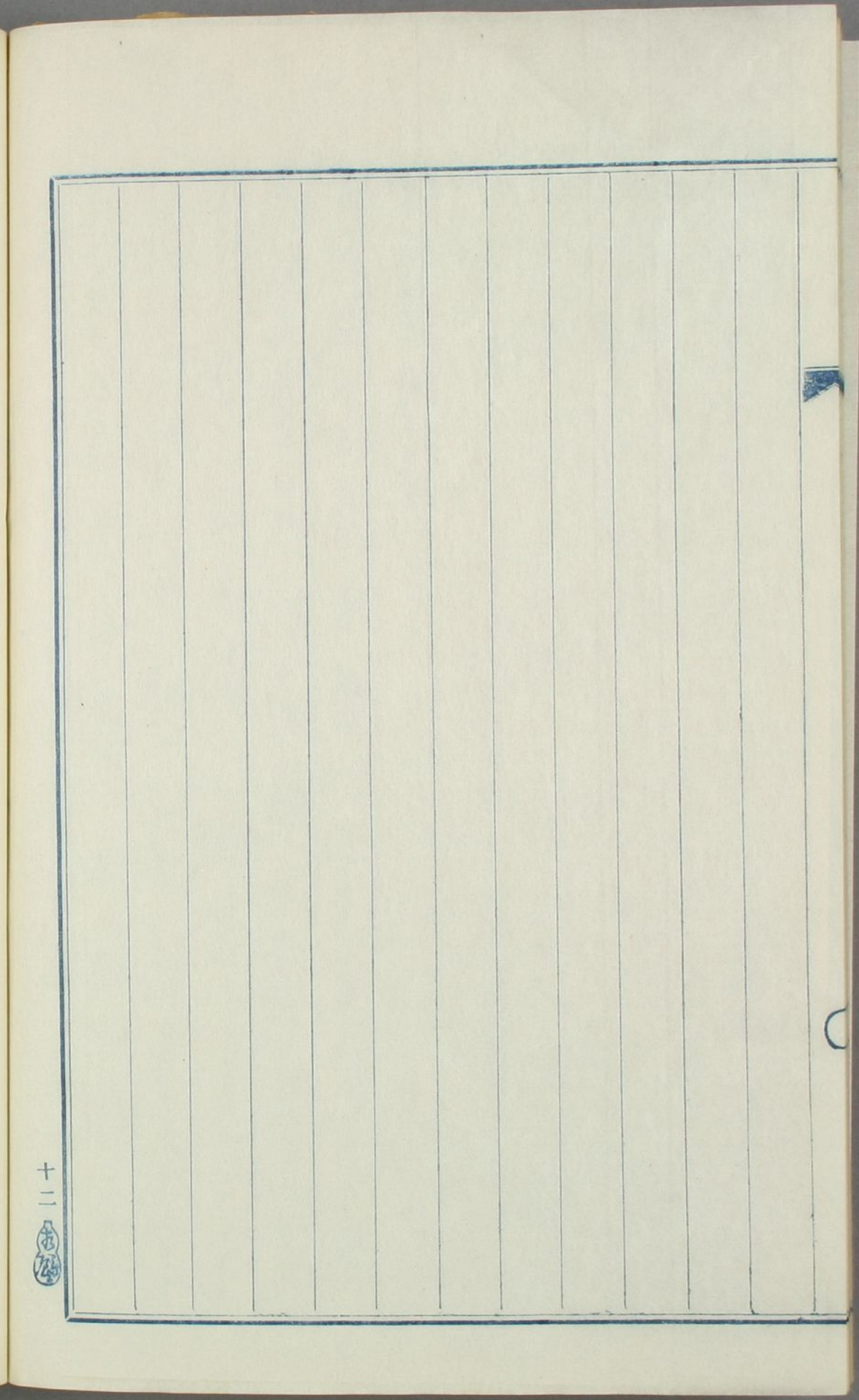
元禄初、撰本、多、日、下、法、帳、の、大
叔、と、心、え、り、り、其、其、中、に、此、の
無、可、知、り、性、年、格、平、軟、壽、の
と、一、本、端、々、に、受、け、し、り、今、も
亡、く、今、に、於、て、其、ひ、り、を、論、じ、し、て
也、年、稀、觀、さ、り、此、の、買、物、を、以、て
本年の打止とす

十二月三十日記

○早稲の夫侯井言、と、ある、河、血、尿、排、出、一、時、分
量、十、分、一、を、占、め、漸、や、減、り、以、て、五、日、目、三、三
十八、日、ま、わ、り、体、温、昂、進、し、り、以、て、父、家、族、を、驚、か、し
脱、逃、の、者、と、し、り、由、密、に、し、り、今、も、あ、り、し
井、ら、り、と、し、り、毎、日、冬、脚、容、態、を、察、し、り、何、
分、大、患、に、し、り、其、の、裏、筋、一、向、回、後、の、扱、子、と、し、り、
日、更、に、な、り、と、し、り、此、何、の、と、し、り、或、は、
後、高、を、食、く、り、の、前、兆、と、し、り、あ、り、お、や、と、し、り、氣、を、見、
夏、中、内、に、せ、め、り、り、高、高、勢、部、の、面、に、り、身、脚、
を、求、め、第、一、の、後、の、子、を、協、助、し、り、と、し、り、
あ、り、り、り、其、後、九、物、と、出、張、し、り、振、り、り、生、況、に、
福、田、勝、士、河、東、と、し、り、診、察、し、り、り、扱、子、と、し、り、敢



十二



十二



以下全て
白紙

